Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-31

ジェンダーを生きる

窪田，幸子

(Citation)
制度と生活世界：21世紀の教養　4:14-25

(Issue Date)
2004-04-22

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001749

I-2
ジェンダーを生きる

窪田幸子

I-2-1　文化人類学とジェンダー研究

異文化とジェンダー

オーストラリアの先住民であるアボリジニのコミュニティーを訪れるようになって，20年近くになります。文化人類学では，長期に異文化に住み込み，彼らの生活に参与しながら調査を行うことが方法論の中心です。大学院生のときの最初の長期調査で，ある家族の娘として受け入れられた私は，その後もほぼ毎年のようにこのオーストラリア北部海岸地域の調査地を訪れてきました。アボリジニは複雑な親族関係をもつのですが，ある特定の家族の長女として，その網の目の中に組み込まれた私は，その社会的立場に応じた行動をもとめられることになります。彼らの「常識」をこえるような言動をとって彼らをあわてさせることがないように心をくだくことになるわけです。そしてそこではジェンダーという枠組みも，彼らの「常識」のひとつであることに気づかされることになりました。

「ジェンダー」という言葉は，日本でもかなり一般的につかわれるようになってきました。ジェンダーとは，生物学的性差であるセックスと区別した言葉として，女/男という社会的な枠組みのことをさし，その社会で期待される「男らしさ」「女らしさ」を意味する「社会的，文化的に規定される性別概念」として使われています。ジェンダー概念の展開の前提としてしばしば言われるのは，西洋において近代，宗教的権威が弱まった結果として，自然科学による性差の強調が必要となってきたという点です。宗教的権威が明確であった時代には，女性が男性に従う事は神の示された道であり，そのことに疑問を抱く必

要はなかったわけです。ところが，宗教的権威が落ち，男女差を自明なものとする論理が失われ，そこで，女性と男性の差を説明する論理として自然科学による生物学的決定論がもとめられることになったわけです。これを論証するために体力，知力，脳の構造，精神，などについて決定的な男女差があり，性別によって能力や性向は決定されているとする研究が重ねられてきたといわれます。それに対して，生物学的決定論に疑問を呈し，異議申し立てを行ったのがフェミニズムだったのです。

1976年にフランスで開かれた国際シンポジウムにおいて，各学問分野において男女の二分法に基づく科学的理解についての再検討が行われました。その会議の声明として，「生物学的性差という基盤は完全には否定できないものの，それをもって直ちに男女の社会的文化的性差を導くことはできない」という認識が示されました。人間存在は生物学的基礎を持つと同時に文化によって形作られる存在であり，この両側面から二重に影響をうけるという認識が示されることにより，「セックス」とは別の「ジェンダー」という概念が始めて明確に提示されることになったのでした。フェミニズムは，生物学的決定論を基礎として男女の社会的役割を決めつけていることへの異議申し立てを行ってきました。生物学的な男女の性差によって，女性は家庭で子供をそだて，男性は外で働くという男女分業が「自然」とされてきたのですが，それは近代家族をめぐる西洋で生まれた新しい「常識」に従っているにすぎず，「男らしさ」「女らしさ」は，文化の中の約束事として作り出された概念にすぎない，という主張です。この「ジェンダー」という概念は，社会人文科学分野にも影響を与えることになっていきます。

ジェンダー視角の展開

女性学と呼ばれる分野が成立するのは，第二次世界大戦後のアメリカでした。この時期，フェミニズム運動が飛躍的に展開していきましたが，その流れの中で，既成の学問のあり方そのものを問い直すような問題提起としてあらわれてきたのが「女性学」でした。フェミニズムは，従来「人間」といったときに，暗黙に男性を指してきたことを批判し，女性の復権を訴えてきたのですが，学問の世界においても，女性へのまなざしが欠如していたことを問題としました。あらゆる分野で問われてきたのは，男性に関する諸事実であり，女性についての事実は欠落していたことを指摘し，それを補うことが必要であるこ

とを強調しました。

そして，1980年代からは「ジェンダー研究」があらわれます。これは，既存の学問のなかに，社会，文化的性差の刻印を受けた存在として男女という視点を持ち込み，両者の関係性を問うものでした。その多くは，既存の学問分野において，ジェンダー関係の解明をめざすことによって，個別学問領域において新たに見えてくる視点を問うものであったといえます。

人類学において女性を中心としてあつかう研究が始まるのは比較的早く，1930年代にマーガレット・ミード，フェイス・ケイバリーなどの女性の人類学者による民族誌があらわれます。しかし，本格的に男性中心主義の修正が活発となるのは，やはりフェミニズムの影響をうけてのことでした。そして，1970年代になると「女性」の研究課題を中心に「女性の視点」がさかんに導入されました。そこでは主要な二つの研究の流れがありました。そのひとつは，女性の地位についての通文化比較です。多くの社会で程度の差はあるものの，男性優位が普遍的にみられることが指摘されたのでした。二つ目の研究の流れはこの普遍性の根拠，その概念枠組みの探求でした［オートナー　1987，ロザルド　1987，中谷　1997］。

このように，70年代になってジェンダー視点からの研究が展開されてきたのですが，それまでも人類学の研究においては女性の存在が完全に無視されていたのではなかったのです［Moore 1988］。ある意味では，社会の記述を行う中で，女性についての記述は必須でした。たとえば，長く人類学の中心的研究であった社会組織の研究においては，婚姻関係や家族構造が注目されるわけですが，そこでは女性が重要な要素として記述されてきました。しかし，それはあくまでも交換される客体としての女性についての記述であり，女性の主体性についての視点はなかったのです。

こうしたこれまでの人類学における民族誌記述について，フェミニズム人類学は，男性による三つのバイアス(先入観，偏見)を主要な問題として指摘しました。1つめは，人類学者個人のバイアス，2つめは調査される社会にあるバイアス，そして，3つめは西洋文化におけるバイアスでした。フェミニズム人類学者たちは，この三つの層からなる男性のバイアス構造を解体しようとしてきました［Moore 1988］。こうしたバイアスの解体のための第一歩として，フェミニズム人類学は，調査の焦点を女性に当てていくことをまず重視したので

す。女性の生活，経済，宗教生活などに注目し，これまでに民族誌に欠けていた女性についての記述を豊かにしていくことをめざしました。

一方で，単純にこれまでの人類学に女性についての記述を加えていくだけでは不足であるとの認識もありました。女性についての記述を豊かにしていくことは重要であるものの，既存の学問の中での女性の「みえなさ」を解決し，男性社会のバイアスを解体するには，人類学の理論そのものを再定義することが必要であるという理解です。しかし，それはそう簡単なことでないことはあきらかです。主流社会の，つまり男性のイデオロギーとは別の，女性のイデオロギーとでもよぶべきものを女性がもちうるのでしょうか。女性人類学者は男性人類学者とは異なった世界に対する見方をするのでしょうか。もしもそうであるならば，女性人類学者が女性を研究することには，特別の優位をもつことになるのでしょうか。また，女性というカテゴリーについての問題も指摘されています。すべての「女性」は共通した普遍的経験を共有するといえるのでしょうか。女性の歴史文化的な経験は個別ではないのでしょうか。そうであるとすれば，他文化の女性の経験を，女性だからといってよりよく理解できるといえるのでしょうか［Moore 1988］。

女性人類学者が，女性の普遍性を当然視せず，「女性であるから女性がわかる」という利点のある立場を離れると，自分たちの理論的な人類学の前提だけでなく，フェミニズムの政治的一体性をも疑わざるをえないことになります。フェミニズムは，女性の利益の体系にたいして，共通した女性への抑圧があることを認識し，それを克服しようとしてきました。このとき，対象となっているのは，女性という社会学的なカテゴリーであって，それぞれの女性の個別状況ではありませんでした。つまり「違い」は，女性の一体性をこわすことにつながることになります。社会における政治的プロセスとしての男女関係の解体を重要な目標とするフェミニズム人類学は，論理的困難を抱え込むことになります。

しかし，社会構築や実践にかかわるジェンダー研究は，そのことにかかわらず重要です。その特に注目すべき視点として，ジュディス・バトラーが展開したジェンダーの構築性にかかわる議論を指摘しておきましょう［バトラー 1999］。彼女はジェンダーの「パーフォーマティビティ」に注目しました。これは，ジェンダーを歴史的に構築され様式的反復行為によって設定される，強

制を伴うようなアイデンティティとする視点です。つまり，ジェンダーとは本質的なものではなく，その時代ごとの社会的構築物であり，実は持続する行為を通して生み出され，身体のジェンダー化された様式を通して定義されるようなパーフォーマティブなものであると考えるのです。現在このような視点に立ったジェンダー研究が求められていると筆者も考えています。こうした視点に立って，本論考を進めていくことにしましょう。

I-2-2　アボリジニ社会とジェンダー

女性の記述と人類学

筆者が長年調査を行なっているアボリジニ社会は，男性中心的な社会として語られてきました。多くの民族誌において男性が社会のすべての知識と権力をもつ存在として描かれてきました。20世紀初頭の人類学者は男性中心主義的な視点から社会をみており，社会の下位にあると考えられた女性は，重要な知識や権威からは排除されたものとみなされ，その社会を理解するために重要で意味のある調査対象とはされませんでした。

アボリジニ研究では，親族研究，儀礼・神話研究が常に中心的なテーマでした。親族組織についての豊かな記述の中で，女性への言及はあったものの，婚姻によって男性を中心とする社会集団のあいだを移動する存在であり，婚姻規則に従って，男性主体によって，他の社会集団に与えられる，受動的な存在としてしか扱われませんでした。また，創世神話，聖地，それにもとづく儀礼など，精神世界についての記述も厚いものがあります。しかし，その中心はやはり男性とされ，この記述でもまた，女性の劣位性が強調されたのでした。儀礼の中枢の知識は男性の，とくに成人儀礼をすませた男たちが責任を持つのであり，女性は重要な精神世界にかかわる知識をもたないとされます。このように，社会の中心的な知識と権利は男性主体のものとする記述が一般的に流布し，その結果として，アボリジニ社会は男性中心で，女性は受動的で，劣位の存在であるとするイメージが一般に共有されることになってきました。このような記述はほとんどが男性の人類学者によって行われてきました。そして，女性人類学者は，このような社会についての男性中心的な記述を，見直す研究を行ってきたのでした。

1930年代から，少数の女性人類学者によって，女性が男性と同等に儀礼世

界をもち，超自然的知識を持つという指摘がなされ，女性の地位が単に劣っているとする視点への論駁はされていました。しかし，こうした記述は，女性は社会の中枢の知識から排除されているとする当時の人類学の常識の中で，疑問を持って受け止められ，批判にさらされました。その後も女性による女性の地位や役割，権利についての問い直しの仕事は続けられました。そしてフェミニズム人類学の動きの影響もあって，80年代からはそのような研究が増加していきました。儀礼生活における女性の自律性，政治的集合体の存在，社会組織の中での主体性，などの調査研究がつづいて世に出ることになったのです。

このような一部のフェミニズム人類学者による女性についての民族誌的記述の積み重ねにより，女性の主体性をといなおす試みは継続され，これまでに少なくとも人類学の世界においては，アボリジニ社会のジェンダー関係の情報についての修正はある程度達成されたといえます。しかし，一般社会に共有されているアボリジニ社会のイメージは現在も「男性中心の社会であり，社会の中枢的な知識は男性が握り，女性は従属的である」とするものから大きく変化しているとは言いがたいのが現状です。

ヨルング社会のジェンダー

筆者の調査地であるオーストラリア北部のヨルングについては，1960年代から多くの民族誌がかかれてきました。そのほとんどは男性研究者の手によるものです。ヨルングは，オーストラリアの北部，アーネムランドの海岸部を領域とするアボリジニで，数家族単位の村を構成し，季節ごとに居住地を移動する狩猟採集の生活を送ってきたといわれ，20世紀にはいってから，白人主流社会と接触しその生活を大きく変えました。

ヨルング社会でのジェンダー関係についても，やはり女性が従属的なイメージで語られてきたといえるでしょう。婚姻規則は，男性からみて「母方の祖母の男兄弟の娘方の孫」との婚姻を規定します。この婚姻規則にしたがって，女性は生まれる前に婚姻相手が決められています。また，婚姻は，一夫多妻婚であり，時には10人以上の妻をもつ男もいました。さらに夫婦の年齢差が大きいことが特徴的で，男性が20才から30才年上であることもめずらしくありません。

村は数十人規模で，成人男性の属する氏族の所有地に作られます。男性は，自分の生まれた村にとどまり，他村の出身の女性を妻として迎えます。つま

り，男性は自己の氏族内での親族関係を生涯維持し，土地や聖地との関係も密接であり，女性は反対にそれらの関係が婚姻を契機に希薄になると考えられてきました。

狩猟採集の生業経済においても女性の役割は小さいと考えられてきました。経済的な意味で，女性が男性に依存することなく暮らすことは不可能で，寡婦となった女性は，夫の親族(多くは弟)に寡婦相続されるか，高齢になっている場合は，自分の息子に依存するとされます。

儀礼と神話についても知識を握るのは男性であり，女性は排除されるとされてきました。秘密の儀礼に参加できるのは，特定の氏族の成人儀礼をすませた男性だけです。女性の儀礼への参加は周縁的で，重要な役割を果たすことはないとされます。このように古い民族誌からは，女性たちの役割は制限されたものであり，社会的に従属的な立場に置かれていたアボリジニ女性の姿を読み取ることができるのです。

社会とジェンダー関係の変化

筆者が最初に調査にはいった1980年代中頃までに，ヨルングの人々の生活は，大きく変化していました。狩猟採集に依存し，数家族単位の村で季節的な移動を繰り返すという生活は，すでに過去のものとなっていたのです。1900年代にはいって，キリスト教メソジスト派のミッションがヨルング地域に町を建設しました。ヨルングの人々は町に定住し，雇用労働につき，子供たちは学校に通いました。1970年代から，ヨルング自身による自治が行われるようになりました。それから30年ほどの間に町は発展し，今では基本的な近代的設備はほとんどすべて整っています。

人々はこの町で礼儀や神話，親族組織などの伝統を維持しつつ近代的な生活をおくっています。彼らは，賃金や社会保障の現金を受け取り，店で食料や生活物資を購入します。全体的に失業率は高いものの多様な職業訓練もあります。学校，医療施設もあります。

こうした社会変化のなか，ヨルング社会におけるジェンダー関係には変化がみられます。まず，婚姻が変化しました。調査の結果，現在では一夫多妻の場合でも妻の数は減少し，夫婦間の年齢差も減少していることがわかりました[窪田　1997]。婚姻規則の範囲を逸脱する結婚も増加しています。居住単位にも変化がみられました。町に集住したためほとんどの者が結婚後も自分の親族

から遠く離れることはなくなりました。そのなかで母娘関係や姉妹関係といった女同士の関係が，世帯間および世帯内の人々の紐帯として目立ちます。経済の側面での変化は大きく，現金収入の多くの場面で，女性がより有利な立場にあります。女性の社会的活躍は目覚しく，また，寡婦になっても男性や息子に頼る必要がなくなりました。

社会関係，経済関係においての女性の地位と立場の変化は，神話，儀礼の分野にかかわる変化にもつながっています。神話は男性の知識，世界であるという言説は維持され，実践も基本的にそうであるものの，神話表現の一つの形としておこなわれるそれまで女性には閉じられていた絵画表現を担う女性が現れてきました。

I-2-3　ジェンダー視角の意味

ジェンダーからの問い直し

前節でみたように，ヨルングの社会では，ジェンダー関係に変化がおき，女性の立場は大変強くなったように見えます。この変化は表面的に見れば，ミッションの活動，白人社会との接触の結果，ヨルング社会で社会変化がおこり，それによって男女関係が変化したと考えることができます。しかし果たして，かつては女性が男性に従属的であり，一方的に受動的であったものが，社会変化の結果，女性が優位なジェンダー関係になったと単純に考えることは妥当なのでしょうか。

彼らの社会で特に重要な意味を持つ婚姻関係については，縁組みを決定するのは男性であり，結婚する女性は非主体的であるであるという記述がなされ，そのようにイメージされてきました。しかし実際は，年長男性だけではなく，彼らの姉妹も同等に決定に参画します。婚姻の決定について男性と女性がかかわることは，彼らにとって「伝統的な」取り決めです。男性も婚姻相手を主体的に選択することはありません。つまり，婚姻をおこなう本人である男女にとっては，ふたりともが非主体的なのです。現在の婚姻をめぐってみられる変化は，親族関係に基づいておこなわれる「伝統的な」決定が力をそがれる状況になってきているのであり，女性たちのみが自己主張をするようになってきたということはできません。このことを嘆くのは男性だけではなく，女性も同様であることがそれを示しています。これはジェンダーによる立場の違いよりも，

年令と立場による違いといえます。

居住集団の構成が町への定住によって変化したことは確かです。しかし，かつての村が男性の属する氏族の土地につくられ，その神話的つながりを保障するものだったとされることは本当でしょうか。これまでの研究によって，居住単位の構成は，イメージされてきたような変化のない固定的なものではなかったことが指摘されるようになってきています。特に，結婚の初期には，男性が女性の氏族の土地で過ごすことが一般的でしたし，その期間がときには非常に長かったことも知られています［Peterson 1978］。また寡婦になったのちに，姉妹や娘の居住集団に移動することも多かったといわれます。つまり，姉妹間，母娘間の関係はかつてから重要であり，強い紐帯（ちゅうたい）が存在していたことが指摘されています。必ずしも氏族の土地と居住地の関係は一対一対応ではなかったのです。

生業経済においても，女性の生業にはたす役割はかつて思われていたよりもずっと大きかったことが指摘されてきました。特にオーストラリアの海岸部においては，女性が採集してくる食料が全体の食料に占めるカロリーの割合は70パーセントをこえるという報告があります。生業経済による女性の自律性は以前もあったと考えることができます。

儀礼と神話に関わる女性の役割ですが，これについても知識からの完全な女性の排除というこれまでの記述には疑問が呈されています。女性たちは儀礼の中心に直接関わることはないものの，女性たちは夫や父とともに儀礼の行われる土地の近くまで出かけ一緒にキャンプをします。そして，儀礼で必要なものを女性たちが整えます。儀礼についての細かな知識なしにこうしたことは不可能です。「本当に知っているかどうか」ではなく，「女性は知らないことになっている」という建て前を共有し，そう表明することが重要とされていることがわかります。

以上のように，社会関係，経済，神話世界のいずれの場面においても，ヨルングの女性たちのジェンダー枠組みがかつては一方的に従属的であったとする見方は適切ではないことがわかります。むしろ，多くの民族誌の記述が女性たちの主体的なかかわりをとりこぼしてきたといえるでしょう。婚姻取り決めについての年長女性の参画や，居住集団を構成する契機となる女性のつながり，女性とその所属氏族との関係の深さ，女性の経済的役割，そして神話的知識な

どの諸場面でみられる女性の主体的かかわりは，かつては存在しなかったのではなく，見出されず，記述されてこなかっただけといえるのです。そして，社会変化がおきるなかで，ヨルングの人々はそれまでの主体的なかかわりを継続し，変化に適応して，新たなジェンダー枠組みの実践を構築しているといるのではないでしょうか。

ヨルング女性の実践

女性の処遇だけではなく，儀礼や神話については，ヨルング社会は，一方においていろいろな建前を作りつつ，具体的な諸状況に対してもともと柔軟に対応してきた社会であるといえます。たとえば，儀礼や神話の伝承主体は，父系氏族であるため，女の子しかいなければ，その氏族は絶えるわけですが，そのようなことがおきた際，断絶した氏族の神話をどう受け継ぐかについての柔軟な対応が知られています。女性たちが現在，神話にかかわる絵を描いたり，神話について語ったりする現象は，急激な社会変化の結果として，伝統が崩壊し，ジェンダー関係が混乱した結果とみることは妥当ではなく，断絶氏族への対応と同様な柔軟な対応の延長線上にあると見ることが適切だと思われます。これまで見てきたように，女性たちは，神話についての基本的な知識や，女性同士の親族的つながり，経済力などをかつてから基礎的な力としてもっていたと考えることができます。女性の主体性を最初から認めない記述の中でそれらは見逃されてきていたといえるでしょう。こうしたヨルング社会におけるジェンダー関係が，社会変化に出会ったとき，女性のかつてから持っていた基礎的な力が彼女らに力を与え，現在見られるような対応に繋がっていったといえるのです。

ジェンダーの視点からヨルング社会を見ることによって，これまでのヨルング社会のイメージとは異なる男性と女性のかかわり，その枠組みが見えてきました。ヨルング女性は，かつてからも決して受動的なだけの非主体的な存在ではなかったのです。ヨルング女性たちは日常生活の中で，男たちとかかわり，家族生活からより広い社会的な活動にいたるまで，多様な営みを社会的に構成し，過去から反復してきた行為を慣習的に継続して行うと同時に，そこを基礎として変化に対応し，新たな実践を生み出してきた，ということができます。日常的な実践を「社会の中に構造化された関係を，個人の中に内面化，構造化しながら，また，他方，制約の中で無限にかつ自由に実践を次々とうみだす」

ものと考える視点はここにおいて重要です［ブルデュー　1990］。このような視点は先に指摘したバトラーの視点に通じるものといえるでしょう。そして，こうした視点は，本論で扱ったヨルング女性たちのジェンダー範疇に従った実践と，そこからはみだし，ゆらぐ新たな実践を捉えるのに重要かつ有効ということができます。女性たちはジェンダーという歴史的に付与された範疇を生きるのですが，それは決して固定的なものではありません。バトラーも指摘するように，そこで構造化された制限によってコントロールを受けつつ，主体（エージェント）としての女性は，無限に新たな実践を生み出し，新しいジェンダー枠組みが構成されていくのです。

ヨルング女性は社会，親族関係においても，自己の氏族との関係においても，重要で能動的なエージェントであったし，現在もそうであり続けています。ヨルング女性たちはジェンダー枠組みの構造に従い，また時に抗いながら，新たな実践を生み出し続けていると見ることが可能です。人類学において，このような女性たちの日常の具体的な実践のダイナミズムに注目し，実践のあり様を細かく見，問うことがなによりも大切です。それは，このようなローカルな場での実践についての理解こそが，ジェンダー範疇の変化をはじめとする社会の男女関係の規範を不断に変化させるメカニズムを明らかにすることを可能にすると考えられるからです。

◆◆ もっと知りたい人へ ◆◆

・Kaberry, P., *Aboriginal Woman-Sacred and Profane*, Routledge, London, 1939.
・Kubota, S., Household Composition in a Modern Australian Aboriginal Township, *Man and Culture in Oceania* 8, 1992, p. 113-130.
・Moore, H. L., *Feminism and Anthropology*, Polity Press, Oxford, 1988.
・Rose, D. B., The Silence and Power of Women, In Brock, P. ed. *Words and Silences-Aboriginal Women, Politics and Land*, Allen & Unwin, 2001.
・オートナー，シェリー「女性と男性の関係は，自然と文化の関係か」，アードナー＆オートナー編『男が文化で女は自然か－性差の文化人類学』晶文社，1987年，p. 83-118。
・窪田幸子「女が神話を語る日－オーストラリア，ヨロンゴ社会の現在」スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在－生業文化の変容と再生』言叢社，1996年，p. 53-124。
・窪田幸子「親族の基本構造を生きる－「ムルンギン」の現在」青木ほか編『岩波講座文化人類学 第4巻　個からする社会展望』岩波書店，1997年，p. 159-196。

・中谷文美「『女性』から『ジェンダー』へ，そして『ポジショナリティ』へ」，青木ほか編『岩波講座文化人類学 第4巻　個からする社会展望』岩波書店，1997年，p. 225-254。
・ブルデュー，ピエール，『ディスクタンシオンⅠ』藤原書店，1990年。
・ロザルド，ミッシェル，1987「女性，文化，社会」，アードナー＆オートナー編『男が文化で女は・自然か―性差の文化人類学』晶文社，1987年，p. 135-174。